

2014年5月22日

赤崎寿子さん 昭和八年一月十四日

北九州市八幡生まれ 八十一歳 次女  
姉一人弟二人

町内にて高齢者が経営する山菜料理の店「グランマ」。その取り組みには、高齢者コミュニティビジネスの実践モデルとして全国各地から視察が訪れる。八十一歳になってもバイタリィー溢れる赤崎さんを尋ねた。  
ピンポン♪

「あー、入って入って。貳又君ご飯食べた？  
食べていきなさい。」

いつもの、赤崎さんの張りのある賑やかな声で迎えてくださった。



### ● 病弱だった幼少時代

私はちよーミニ、とても小さい子どもだった。身体がとても弱い子だった。病弱で四年生のとき肋膜炎になった。

私が生まれたのはね、八幡製鉄の社宅で生まれたのよ。

「えーっ、わたし社宅で生まれたのって

感じ。」昔の人だからね。それからね、幼稚園とか行っていないのよ。小学校に入學して四年までいたね。四年生でっていうか私は肋膜炎をやったのさ。だから毎年ね、これすると（注射のしぐさ）陽性ができるしよ、それがずっとでたの、一年生から。それで保健所に毎年一年に一度、先生に電車に乗って連れられて、保健所にね、それでレントゲンを撮られてたのよ。四年の時に肋膜炎がでたのさ、それで学校に行かなくなったのさ。

### ● 絵本が大好きだった

で、その間、なぜ学校に行かなくなったのが良かったかちゅうと、小さい時から本を読んだから。もう今の当たり前の本じゃなくて三歳・四歳の時から、もう絵本を買ってくれたの。

私はね学校いくまでね。母親に育てられたんじゃないのよ。祖父と祖母に育てられたの。弟が出来たもので母が病気がちで祖父と祖母が私を育ててくれたの。それで小学校上がるときに初めて親のところに戻ったの。自分の親元へ。

近くだよ、そんなに遠くないの、同じ八幡だからね。小学校に上がるときに家に帰らないと小学校に行けないよって言うんで、帰りたくなかったんだけど、仕方なしにしようがなく帰ってきた。

楽しかったっていうより、私の母親は一人娘さ、で母親っていう人は生んだ人じゃないのよ母親は、。ちよっとね家の家系は面白いのよ。なにしろ親類がないのさ、だから私が「なんで親類がないの」って聞いたら、祖父には兄弟がいたんだけど山口県の光ってとこの育ちだったの。明治の時代だから海外に行った

ど本人は元気なのよ。

### ●友達に教えるために勉強した

五年生もほんのちよつとしか行っていないね。で六年のときに母が小倉と八幡の境に転居したのよ。その中学校に行くのには私は病身だから電車でいかなきゃならなかったの、電車で。みんな電車なんか乗せてくれないんだよ。でも私は許可が出てるから、通学できたの、電車でいくとね三年生が門に立っているのよ。同級生はみんな行列で入っていくのに、私は一人で入っていくのさ、したら何で一人で来たとか色々聞くのよ、それが嫌で学校いかなかったの。うはははは(笑)

中学一年で行ってないの、卒業証書もなんもないんだって。小学校六年生の時の卒業証書もないんだよ。どうしてないのかなあと思ってるけどね。

だから中学一年のときもあたしね結構自分で勉強したから、色んなことができたのさ。小学校の時もね、あなたは学校来ないけどね、なんでこんなにね頭が良いんだと友達から言われていたの。だから「教えて教えて」ってね、みんな言っていたんだわ。それで、私がなんで教えるんだろうと思っていたけど、なおのこど勉強するしよ家で、教えなきゃならないから、面白いよね。逆にいつてるのさだから、そういうことってあるんだわ。姉の本とか、なにしろ算数とか答えを先に見てなんでこの答えになるのっていう算数をしたの、参考書とか見たことない。なぜこの答えになるのかと逆算するのさ、この答えならこうすれば出来るんだなって。だから自分で自分の勉強をしたのさ。

学校にいかない人っていうのはね、時

んだってみんな。海外に行くつもりが船に乗る寸前に赤痢に罹って一人残されたの。その頃みんな海外に行ったんだって。それで大きくなってから聞いたの、母が一人娘でしょ、兄弟がいらないからさ。だから母親は、本当にすごく可愛がられて育てられた。一人娘だったから、最後まで我がままだったね。兄弟がいなくて育てられているからね。でも可哀想だよね。で私は祖父と祖母に育てられたときに絵本をいつも与えられたの。

### ●蜘蛛の糸と三つ子の魂

昔の絵本は今のような絵本とは違うのさ、歴史物の絵本がいっぱいあったのさ。買ってくれたの。源義経とかさ、その時に読んだのが芥川龍之介の『蜘蛛の糸』。絵本で見たのさ、だから悪いこと、絶対嘘をつかない、嘘をついたらね絶対に地獄に落ちる、今でもあるの頭の中に、それが三つ子の魂よ。芥川龍之介の蜘蛛の糸は本格的には読んだことがないけど、その絵本で読んで今でも頭の中に残っているよ。三つ子の魂ね、考えられないしよ。それは四・五歳だね、本当に絵本を与えてくれたのさ。小学校にあがるときにも、母が本を買ってくれたの、私の祖父は五十二歳で八幡製鉄を退職したの。私の母は一人娘だったから家も建ててあげたのさ、ミシンから、もうラジオとか、その当時持っている人は少ないのよ。ぜんぶ買い与えたのよ、一人娘だから。なんでもあったのよ。でも姉は幼稚園に行かしてもらったけど、私は行けなかったのよ。小学四年のときに肋膜炎したしよ、それが今でもでるのさ、レントゲンかけるの嫌だと言うのさ、傷が出るの。だけ

間があるしよ、なにしろ病身だから母も学校に行かせないのさ、ちようミニだから私は。



### ●映画がとても好きだった

十四歳の時、旭化成に入ったんだよ私。戦後だからね、男の人がいないのさ、帰ってこないから、それで人が足りなくなつて。近所のお姉さんが「トシちゃん一緒に働かないかい」って言ったの、あたしね、「働きたいけど身体が小さいから働けないよね？」って。でもいいから連れていくつて、その時、塗下駄履いていったの。うふふふ(笑)

塗下駄履いて行ったらね、会社に連れて行ってくれたのさ。したら皆ね「今日は誰か妹さん連れてきたの」って言ったのさ、そしたらね、その人が違うよつて私が連れてきて今日から働くんだよつて言ったの、そしたらね、へえーつてこんな可愛い子がつて。なにしろ小さいからさ、働くと思つてないのよみんな。

して、あんた歌えるのかいっていうから、「歌えますよ♪」って言ったんだ。歌つてごらんつていうから、その時にね流行歌だよ、第一目で流行歌うたつたの。

皆の前で、考えられないよ、いや面白い(笑)。良く歌つたと思うわ自分でも。なんていう歌だつたかなあ、戦後二十二年頃流行つた歌だつたなあ「青い夜霧の火影(ほかげ)が赤い」水島道太郎が歌つた(\*夜霧のブルース)映画があつたのさ、そのの。映画行つたらそれを覚えて歌つたのさ。「あんた上手いねー」つて誉められたの。それが十四歳の時だよ。

### ●いっつとう最初の給料で煙草を買つた

青春とかそんなのないわ、戦後だから。十二歳で終戦だからね。まだまだ食べるものがないんだから。旭化成に行きながら買い出しに大分に行つたんだから。買い出しに行くつて言つたら旭化成は休ませてくれたの。小さな身体でね大根の大きいの買つてきたらね、電車の中で風呂敷破れてたよ。転がつて。これは絶対忘れないよ(笑)大根拾いに行けないのさ、みんな電車に乗つてるから。そういう思ひをしてね。

母が途中で再婚しちゃつたの。母の所にいけないしよ。だから、祖母の所から会社に通つたの。それでいっつとう最初の給料が三百八十円もらつたの、初任給。小倉の魚町つていう繁華街なだけど帰りに進駐軍のタバコが百円だつたの。タバコを祖母に買つて帰つてやつたの。いま考えてもさ、なんで百円のタバコ買つたんだらうと、考えられないよね。でも祖母は喜んでね。

父親が中国から引き揚げてきたの。父と生活することになつたのさ。弟と一緒にね。母は再婚したんだけど、やつぱり気になつたんじゃないの。時々、私たちにね、なんかかんか言つてたもんね。

## ●十八歳で延岡へ

旭化成は小倉の繁華街の真ん中であつたのさ。火薬とかを使うから、都会では住まないからというんで、従業員を延岡と大分の坂ノ市とに転勤させたのさ。坂ノ市というところはね、大分でも何もない所だと聞いたけど、延岡は城下町って聞いて、「そっちに行くつ」て言ったのさ、城下町って気に入ってね。小倉は勝山って小倉城があつたからね。

その時から、そういうのが好きだったんだね。なんとなく。で、延岡の方に転勤して行つたのさ。それが十八歳の時だよ。それから延々と延岡にいたのさ。

## ●初恋

初恋とかそんなのなかったんだけど、会社の皆から可愛がられたの。面白いって言つて、そしてハキハキしてるから男の人から可愛がられた。結婚してる人がトシちゃんトシちゃんって可愛がつくれるの。本当に可愛がつくれたね。顔じゃないよ、性格が可愛かつたんだね。本当に初恋っていったら八十歳の人も生きているんだわ。その人が結婚するときは「なぜこの人は結婚するの？」と気がしたね。とられたような気がしてね。今も延岡にいるよ。でももう歳いってさ「映画やら行つたの覚えてる？」って聞いたらさ「そうだったっけ？」「あんた覚えてないのかい！」って、映画にも行つたことあるのよ。同じ職場の人。それ二人で行つたことあるんだけど、奥さんも綺麗な人だったけど、先に亡くなったの。岩見沢の友達と私に延岡に帰って来い、帰って来いって言うの。帰ってもあんた

も八十だし私も八十だから話しても大したことないしねって言うの。こつちの方が面白いっていうけど。そうはいかないんだわ。私の上司も九十歳さ。女の人だよ。頭もしっかりしているし、字も綺麗で手紙も素晴らしい字を書くの。いまでも年賀状とか連絡も来るの。何しろ私は可愛がられるんだね。はっきり物言うんだけど、なんか楽しいのかね。

## ●結婚

結婚したのは、とし？えっーと。うーん。二十四、はっ、あつ、二十五歳。二十五歳でうちの息子が生まれてるから。だから二十四歳だね。延岡で二十四歳のとき結婚したの。旦那とは同じ年。うちは頭の良い人だったの。級長で。でも、そんな夫も父親には馬鹿にされてたわ。威厳がある人でね。

父親がゼロ戦のエンジンがおかしいところを見つけた人なの。だから国からね、金鶏勲章貰つた人なのよ。この前テレビNHKで佐世保の防空壕が出てたのよ。そこで毎晩ねウイスキー飲んでいたって、日本が負けるのをわかつていたから。ウイスキーだよ。へえ、ここがウイスキー飲んでた防空壕だつて思ったもん。

話は面白いとくもんだと思つたよ。だからもう戦争負けて帰ってきた時はね、耕運機や時計の修理をしたり全部してたつて。そんな仕事をする人ではないんだよ、だけどほれ、ゼロ戦の音を聴いて直した人だから、強かつたんだね。

### ●夫は寡黙でとても優しい人

あの人はね、柔道の選手だったのよ。国体に出るすごい良い選手だったのよ。柔道の審査員が旭化成にいたのよ、東京の本社にいてね、その人に凄く見込まれていたのよ。「赤崎を東京の国体に出すって」言つて。宮崎での大会で五人を抜かなきゃならない、その四人を抜いた後に五人目に友達を与えたの、「二郎（夫）がもう疲れているからお前は負けてくれ」と言われていて。うちのが手を抜いたのが嫌だったんだね、その人が負けたくなくなり投げてしまった。それで東京の国体に出れなくなったのよ。

旭化成は柔道が強かったでしょ。オリンピックも出てるし、あの人は延岡でも優秀だったのよ。身体が小さくとも絶対投げられなかった。特技をもっていたんだね。でもそれが運の尽きつて言うのかなあ。ここにきて、白老の柔道場に観に行つてたんだよ。あんた教えてあげればいいんでしょと言つと「俺の出番じゃないね」といい、観に行つては帰つてきてた。柔道着も持っていたけど同僚の小松さんにあげたわ。あんた、一生もつておけばいいんじゃない、死んだら棺桶に入れてやるよと言つてたけどね。小松が欲しがつてたからやるよと言つてね。だから、運つてどこでなくなるか、運がどこで尽くかそういう瀬戸際だね。そういうの見てきたから。

### ●故郷を想う「父の存在」

北九州の色ねえ、八幡製鉄があつたからね。洗濯して干しても黒くなるつて皆言つてたけど、黒いイメージではないんだよ。なんか楽しかったよね。山田洋次

の『釣りバカ日誌』あれの北九州があつたの、うちの町名が羽衣町つて私たちがよく遊んでいたところも出たの、映画に、だからDVDが出たら買おうと思つてる。延岡はね、マラソンの選手がいて、ロードつて走るところがあつたの。寮の横が川だったのそこでみんな遊んでいて楽しかったという感じかな。登山とかグループに良く入つてたね。

私は寮に入つていた時、朝日新聞を取つていたの。私の父は朝必ず玄関に立つて新聞を読む人だったの。新聞つて玄関で立つて読むものだと思つてたの。母がみんなを起こして「いつてらっしゃい」と玄関で手をついて、朝会社行くときに、みんな兄弟を座らせて「いつてらっしゃいませ」と言わせていたのうちは。「眠たいのに起こして」と言つて。立つて玄関で、そのイメージが今でもあるのよ。だから、新聞は朝見るものだというのが今でもあるの。

こういうのつてこわいよ。四時に起きて新聞読むの。小さいときの記憶とか大事なことと思うね。新聞が無ければやっていけないね。だから寮に入った時も新聞を取つていた。そしたら寮母さんが言ったことがあるよ、「貴方はね、朝日新聞のような難しい新聞を取っているけど、新聞を読んでますか？」つて「読んでるから、取つてるんですけど」と答えたら、意地悪で国会が行われているけど第何回国会か分かりますか？つて。今でも忘れないよ、こういう意地悪をする質問をする人は。その後に来た寮母さんは良い寮母さんだったけどね。

## ●向こう側の世界

他にも婦人公論、装苑（ファッション誌）という雑誌を読んでいた。ファッションにも関心が高かった、「こういう服着たいよねえ、こういう服良いよねえ」って、いつも言っていたけど、そのファッションはもう絶対的だったね。本を見てね、こういう服着たら良いよねえーって、思うの・・・思うだけだよ。向田邦子がそういう本を作ったの。だから向田邦子の本は全部読んだ。婦人会で何十周年で投稿してくれと頼まれたので、向田邦子のことを書いて投稿したよ。

## ●憧れの北海道へ

白老に来たのは三十七歳。息子が小学五年生と娘が二年生の時に来た。みんな止めたんだわ学校の先生も行くな行くな言うって。けどどうちのと二人でね、定年になったら北海道へ行こうねと言っていたんだわ。でも、転勤の話がきて、私が北海道に行くって言ったのさ。三年でいいんだから行こうと言って。

三年が一生ここにいるとは夢にも思わなかった。ねえ。

北海道に憧れていたの。『氷点』にね。三浦綾子の氷点が新聞連載になった時に、毎朝、新聞が入ってくるのを楽しみに新聞を読んでいたの。「あー明日がまち長い」って感じで。それと原田康子の『挽歌』、この本を読んだの。で、北海道のイメージが頭の中で、ゆらゆらしてたのさ。三浦綾子の氷点とね、原田康子の挽歌。もうこういうので北海道に絶対行ってみたいというのがあったのさ。だからうちの説得したの。

白老はイメージと違ったけど、もうそ

んな事どうでもいいのさ。北海道を色んなところを見て歩こうっていうことさ。三年で北海道を全部周った。三年したら帰るといので。利尻礼文にも行ったんだよ。



## ●白老での忘れられない出来事

田舎だねえーと思った。着いてすぐね。お肉買いに行っただわ。今の町のね。そこでお肉を買ってお金払って手袋を置いたら、横の人が手袋を持っていつちゃったの。次にすぐ近くの八百屋さんに行ったらその人がいたの。そしたら女の人が私の手袋持ってたわ。「その手袋私のですけど、今肉屋さんで無くなったんだけど、その手袋私のです。」って言ったら「あらそう」って返してくれたの。それが白老の第一印象。はじめて町に買い物に出た日。「あーここは黙って持っていくとこだと思った。」そういう目にあったの。ふうん、忘れられないね。

したらね、延岡というところはね。サービスセンターがあって、綺麗にね、蠅が一匹もいないとこだったの。それはもう蠅が一匹いたら大変なことよ。モノが

売れないもん。

それが、そのオカモトさん（八百屋）に行ったら蠅ばっかりさ。外に魚を干してたから。蠅がいつぱいさ。こんなの食べたら赤痢になるんじゃないかと言って、白老で買うのをやめたの。それで苦小牧の王子や大昭和製紙の構内にあるスーパーに行つてたの。旭化成でバスで連れて行ってくれたの。

だから、白老のイメージっていうのはね。怖いって言うんじゃないかって、何だろう、暗いイメージ、暗かったねえ。

### ●人生の分岐点

それで、さあ帰るよと行つたときにね、今度は工場長が三年ではなくて、もう少しおれということ、それで、うちのを町会議員に出したのよ。

社命で、町会議員になれと頭から命令さ。うちのはそんなの嫌だと言つたのさ。うちのは話せる人じゃなかったから、仕方なし出たのさ。それで二期目に落とされたのさ。

だから私が今にあんたを男にしてやるつて言つたの、それで次に千何票（トップ当選）とつたのさ。半分わたしの票だよ。負けてないって、そういうのには私は。会社なんてどうでもいいって言つたの。千何票とつて、会社がびっくりしたのさ、会社では八百票しか無いのに、なんでこんなに票が獲れたのかと。絶対負けないの。うふふふふ（笑）

考えられる？今でもその性格あるしよ。あたしの中では、この人と思つたら絶対に大事にするのさ。そういう性格なのよ。

### ●三十代 地域に出て学ぶ

本格的に色んなことを知ろうとしたのは、北海道に来てから。三十七歳で来たんだからここに。延岡とか北九州にいる時はまだ子どもだからね、十何歳くらいで、一番過渡期だよ、日本としては、終戦があつて、戦前・戦後の一番厳しい時だよ。

ここの町内会で子ども会を作つたり、月に一回、子ども新聞をだしたの。それで子ども新聞が北海道で評価され、うちの町内会が表彰されるといふことで、誰が行つたと思う？町内会長と役員三人が行つたんだよ。私たちが作っているのに、知らせずに一言もなかった。これはおかしな町内会だと思つた。もう町内会は相手にしない方が良くと思つた。

その時に、“ひこばえ白老知ろう会”を作つたの。成人式に毎年アンケートをして十年間で結果を出したんだよ。その時に全部の歴史を聞き取り調査したのさ。テープもつてね。

歴史を学んだのは、自分が住んでいるまちを知りたかつたからさ。白老に来て六年間は社宅にいて、その六年間は勿体なかった。町議になって、赤崎は外に出て活動して欲しいと言われてね。もう社宅を出た時は、私は「もう、ここから頑張るぞ！」つて。

### ●素晴らしい出会い

引つ越して間もなく、斜め近所のAさんが、北海道新聞に投書したの。お金を拾つただけで、それを警察に届けたけど御礼も何にもないって、相当な金額が入っていたらしい。それを北海道新聞に投書したのよ。「素晴らしい！」と思つ

たの。こういうことをね、投書する人は普通の人ではないと思って、ちよっかい出したの。こういう投書するのは素晴らしい人と思つたの、当たり前の話でしょ、そんなのみんな泣き寝入りでもういいわと思うしょ、白老で投書したこの人！と思つたのさ。それでAさんに声をかけて“ひこばえ”をしたの。



### ●新たな風

その頃、婦人会に入った。婦人会に入ったのは四十四歳のとき、当時は町のお金ばつかりさ。各団体の会長さんが嵐山にある国立会館に勉強に行ったのさ、そしたらその結果報告がなかったから、婦人会に入ったばかりだったけど「どうして大事な所に行ったのを発表も何もありませんか？」と言ったら、生意気と見られたのよ。あの女は生意気だって。当たり前の話さ、九州では。ねっ、だけど白老、北海道では当たり前じゃなかったのさ。

そしたら、次の年に私に行けとなったのさ。私に行けと言つたって婦人会で何もしていないのに、今婦人会に入ったば

かりですよと言つたけど、でも良いと行けど。それで国立婦人教育会館に勉強させてくれたのさ。

### ●九州のおなごたいっ！

私は、婦人会の副会長をやった。四十周年のとき、私が盆踊りが良いんじゃないのと提案したの。そしたらいいねえーで。そしたら、その盆踊りが大変な盆踊りだったのよ。全町巻き込んだ盆踊り大会やったしょ。それで、わたしね、婦人会って、町のお金、教育委員会のお金しかあてにしてないのさ、だから自分たちで運営するのは自分たちでお金を得なければ駄目だと言つたの、それが私の持論だったのよ。それで二日間で何百万ものお金を稼いだのよ。みんな協力してくれてさ、焼き鳥焼いたりね、焼きそば作ってくれたりして、全町回って寄附をもらってきたから。二百万円くらい。それを婦人会に全部あげて、その一部の二十万円だけでもらつて婦人会の会員さんをニュージージラランドに連れていったのよ。ニュージージラランドに行ったんだよ。十何人くらいで。

わたしは「九州のおなごたいっ！」て思うね。

### ●生涯学習が私の原点

四十四歳から婦人会活動の中で、教育委員会の婦人学級や生涯学習を進んで学んできたの。当時の教育長、社会教育課長などが人材育成に取り組んでいてね。

一度もかかさずに話をききに行つたの。それが北海道を知る切っ掛けにもなったの。白老には国の指定史跡「仙台藩白老元陣屋跡」があるしょ、その勉強会に



入り十年間ボランティア解説をさせてもらったの。

白老は知れば知るほど奥が深くてね、他町から入ってみると本当に良い町よ。

### ●六十歳 好奇心でいっぱい

初めて海外に行ったのは六十を過ぎてから、最初はヨーロッパ、それから海外づいていくのさ、いまだに。うふふふ

ヨーロッパでしょ、ニュージラランド二回行ったしよ、サンフランシスコも行ってからねアメリカ、それからトルコ、ケネル行ったしよ、オーストラリア、こないだはハワイ。時々思い出すんだわ、「何処いったかなちゅって」。

何せ最初に海外に行くならヨーロッパからというのが絶対あったからね。

### ●まちづくりはヒトづくり

もう八十歳になったら、何でも誰にでも言えるんだわ。悪いけど。いつ死ぬか分からないんだもの、八十過ぎたらね。

死ぬ前にやっぱりね、自分の住んでいるまちがどうなってくるか、方向性がまだ見えないしよ、見えてないんだよ、まだ白老の方向性は。

どんなに町長が出たって。どんどん人口が減ってきているんだよ、じゃあ今の白老をどう考えているのか、町長だけじゃないよ、役所の副とか課長とかいっぱいいるしよ、こんなの誰も頭ないよ、悪いけど。わたしが町長になった方が頭あるわなと思う。ホントに。八十じゃなかったら出るわって、あたし。

ホントに情けないよ、白老のまちって。まちが発展する前に、人材を作っていないかなきやだめ、「人・材・育・成」。ねっ、

その人材育成ちゅうのは、本人が本当に勉強したい人を出すということ。誰でもかたでもダメ。

やっぱりねえ、白老のまちをどうしようするではなく、知ることだねえ、まちを知ること。自分がここで何をすべきか、という事が課題だね。役所の人もそうだって。赤崎のところに勉強来いって！教えるから。怒られたら、おつかないってね。(笑)

### ●いじわるばあさん

長谷川町子の『いじわるばあさん』ね、若い頃に見てて、絶対こういう人になると思ったの。本見て、「わたし絶対こういう人になりたい！」と思った。長谷川町子の意地悪婆さんってさ、意地悪じゃないんだよ、相手が分かんないから教えてやってんのよ。それが意地悪婆さん。そうそう。教えるために意地悪くしてるのよ。わたし、意地悪婆さん読んだの小学校五年か六年のときだよ。分かる？意地悪ばあさん、かなり私も意地悪でしょ。あーあ、そういうときから人を見るということをやってきたのよ。「ひとをみるの」人を見るの早いよ、わたし。

人の判断。やっぱり、裏も表もないことだね。二重人格は即わかる。誠意のある人はね、二重人格を出そうと思っても出せないのよ。だから、その人がどれだけの誠意があるか先に見るっていうの、で誠意がなくとも、その人が真面目になんでも取り組んでいるかというところを見るのよ。そういうので人をみてくね。うふふ

やっぱ、八十年も生きていれば人を見るということは面白いんだわ。意地悪婆

さんじゃないけどね。だから、みんな言うよ、わたしのこと、いじわるばあばって。



### ●ひとやま十円

特別、嬉しかったことってないねえ、いつもなにか知ろう知ろうとしてき、生きてるからさ、これが楽しかったよねえって、毎日、なんか平平凡凡としてるんじゃない。まだまだ意欲あるって感じだもん。物足りないのよ。すべてが……すべてが物足りないんだねえ。そうだけわ。

白老を一言でいうと、白老って知れば知るほど面白い町なんだけど、本当に白老を知ろうという人が少ないってことね。それを公にして白老を表現すると面白いかもしれない。だからその表現が私たちは「グランマ」おばあさんの店っていうことを表現してるのさ。これだけ山菜があるのに、今までみんな手をつけなかったってことさ。自分たちの家で並べていっぱい採ってたって、上勝町のようにお金になるんだよね、しかもみんなが元気になる、高齢でこれだけお客さんも色んな所から呼んでいて、テレビにも注目されている、一つ一つあげたら大変なことだよ。こういうことがあるのに気がつかないってことさ。

気づけば時計は二十二時をまわっていた。

外に出ると、うっすらと幻想的な霧に つつまれた。吐く息が白い。

手土産にいただいた極上のワインと燻製を手在家路をたどる。

一歩ずつ確かに、かみしめながら。

淡い霧のトンネルを抜けると星が煌々と輝いていた。

なぜか、心が熱くなった



「わたしはひとやま十円にはなりたくない。みなと違うことをしたいと常に思っていた。今でもそう。人がしないことをしたい。違う人間でいようと。これが私の語録」

帰り際、とても心に響く言葉だった。

あの星の輝きよりも、

ステキに輝きはなつ赤崎さん

いつまでも、いつまでも

お元気でいらしてくださいね！